

連載7 「疑似父親像としての園長」

「園長さんと散歩したい」、そんなことを時々言われたりする。こんな時に、「私には人気があり、皆から好かれている」なんて勘違いをして、安請け合いしてはいけない。こんな誘いには深謀遠慮が必要だ。

散歩を始めたなら、本人が断らない限り、それを続けた方が良い。ひょっとしたら一年以上になるかもしれない散歩を、続けることができる時間と回数を定めて定期的に繰り返すことができることが良い。始めた散歩を途中で園長の都合で止めるようになることは、大いに本人の心を傷つけることになるからだ。

それには、もちろんいくつかの理由がある。

まず一番最初に考えることは、その方の家族背景である。特に父親との関係。園長という立場は、事業所内では父親的なイメージを彷彿とさせるから、その方が過去に十分な父親との愛着関係を結ぶことができなかつたとすれば、理想の父親像を求めて、幼き頃にできなかった父親との経験を園長に求めている可能性が高いからだ。その方が虐待家庭で育ってきたとすれば、園長との散歩経験は、確実に大きな治療効果、行動変容のエネルギーを提供することとなる。

手をつないで歩くこと、自分の行きたいコースやペースに合わせて父親が歩いてくれるということ、自動販売機でコーヒーやジュースを買ってもらうこと、父親の飲みたいものを聞いてそのボタンを父親の代わりに押すこと、誰にも邪魔されないで二人だけの一体感を「あ！一番星だ！」とか「カエルが声が聞こえる」などと味わうこと…、実は簡単そうに見えるこんな愛着につながるような行動を十分に経験していない方々は意外に多い。知的障がいの方々は、しつけや訓練にさらされることが多いから、ややもすれば親子関係にはいつでも緊張が伴うことが多く、絶対的な安心を経験できる時間は

意外に少ない。

人生には、忘れ物は禁物である。忘れ物をしたままその時代を過ぎると、必ずどこかで人生を引き返し、その忘れ物を取りに戻らなくてはならない時が来る。

幼い頃に、自分の身体を全部母親に預けてしまうような安心と信頼の抱っこやおんぶの機会が十分無いままに育てば、思春期を過ぎても赤ん坊のような身体接触を求めるようになるだろう。

すでに若くして父親を亡くしている場合には、生前の父親の追体験として園長を求めている時がある。

男性であれば、一緒に温泉へ行く、一緒に電車に乗る、ドライブに行く、一緒にビールを飲むなど、生きていれば、父親としていただろう、あるいは生前の父親としていたことと重ね合わせる形で、疑似父親としての園長との体験を求める。例えば、同じ温泉行きでもその嬉しさは通常の百倍となる。

女性であれば、バレンタインのチョコレートをプレゼントする対象になる、なんてことが疑似父親として園長ができることである。

対人支援において、特に行動変容や治療効果を期待する時、「裏切る」という行為が致命的な失敗となる。できない約束はしないことが、結果として「裏切らない」ことにつながり、たとえ散歩の約束であっても深謀遠慮が必要になるのは、一度失くした父親像を再構築する途上で、疑似父親像としての園長の裏切りは、二度目の父親喪失をつくり、取り返しのつかない心の傷をつくるからだ。

大きな疑似家族として、明星学園は成立している。人生で失くしたもの、落としてきたもの、そして忘れ物、大切なものを皆ここで捜している。